



## 「雪と氷の図鑑」

武田康男 [文・写真]

草思社, 2016年10月

108頁, 1,800円 (本体価格)

ISBN 978-4-7942-2233-6

「雪と氷の図鑑」は、その名の通り雪や氷の造形に焦点を当て、そのさまざまな姿を約170点の美しい写真と解説により示した本である。しかしながら、雪の図鑑と聞いて、まず想像するような、雪の結晶の幾何学模様注目したような内容ではない。本書の大部分は、少し寒い地域の普段の生活で見られる雪や氷の様子を、空の写真家で気象予報士でもある著者が自ら撮影した写真により示している。その身近さから、科学の図鑑というより、生活の図鑑、そのような印象を受けた。身近な風景であるからこそ、実体験することも容易であり、この分野に詳しくない方々の興味も引きやすいように思う。そのような意味で、身近な現象を眺めるきっかけによいのではないか。「はじめに」の最後で、この本に興味を持ったなら、ぜひ野外で実物を確かめるように、との著者からのメッセージがあるが、それに相応しい内容であろう。また一方で、昔寒い地域に暮らしたことのある人間としては、またあのときの雪深い風景や窓霜が見たい、そんな郷愁にも誘われる一冊である。

本書は氷をテーマとした第一部、雪をテーマにした第二部で構成され、それぞれ氷や雪をテーマとして、様々な写真を掲載している。

第一部「氷」の第1章「水面にできる氷」は、冬の寒い日に少し気にしてみればその辺で見られる普通の水溜りや池などの氷の話題から始まっている。そういった身近な氷でもよくよく見ると様々な模様が浮かび上がっており、身近なことでも気にしてみればいろいろな発見がある、そのようなメッセージが含まれているように感じた。第2章「水が流れてできる氷」では、氷柱や氷瀑、しぶき氷などにスポットを当てている。これらは、寒い地域では身近なものであるかもしれないが、そうでない地域からすると興味を惹かれる題材である。氷瀑と言えば東京都でも檜原村に弘沢の滝という結氷する滝がある。ここ10年ほど完全結氷に至ってはいないということだが、氷の造形に興味を持った方があれば、寒い朝に訪ねるのもよいだろう。

第3章「生えてくる氷」では霜柱に注目している。特に関東に暮らす人間には霜柱はなじみ深い。冬の寒い日にサクサクと踏みつぶした思い出がよみがえる。また、シモバシラという植物が作る氷の造形にも触れている。評者も前述の弘沢の滝近辺でシモバシラの氷の花をみたことがあるが、なんと繊細な淡い氷であった。第4章「降る氷」では雪霰や雹に触れている。これも、特徴的な大きな雹に注目するのではなく、東京でも見られるような雪霰に触れているので、身近さが増す。また、なかなか写真では表現の難しい雨水にも触れているのが興味深い。雨水は過冷却の雨が落下して凍結する現象であるが、降った直後に路面が凍結することから、スリップ事故なども起こりやすく非常に危険な現象である。日本ではあまりなじみがないが、米国や欧州では冬季の危険な現象としてよく知られており、そのような地域に滞在予定のある方などは予備知識として知っておいたほうがよいだろう。第5章「つく氷」では霜や樹氷などに焦点を当てている。霜も身近な現象であるが、朝日に光輝くととても美しい。ところで写真5-7「温泉のフロストフラワー」が、若干印刷に解像度が足りていないように見えるのが気になった。美しい造形だけに残念である。これは実物を見に行かせようとする著者の策略であろうか。評者は以前、北海道の然別湖畔の温泉で同様の造形を見た記憶があり、できればまた見に行きたいと思ったところである。第一部の最終章、第6章「動く氷」では氷河や流氷に触れている。さすがに日本では大きな氷河がみられないので、本章の写真は海外中心だが、これまでの身近な風景から遠くに思いを馳せる、そんな気になれるかもしれない。ここで、導入に海外の氷河を用い、その後オホーツクの流氷の話題としているのも著者の意図を感じる。アラスカは無理でも網走なら訪ねることができる、そんな気にさせる構成となっている。

第二部「雪」に移り第7章「降る雪」では、空から降ってくる雪に注目している。特にストロボのマルチ発光による雪の軌跡の写真が印象的であった。雪の写真は高速シャッターにより止めてしまうと、なかなか降っているという印象にはならない。しかしながら、このような技術を用いることでその動きも捉えることができる。この際の軌跡に見られる複雑な雪の動きも興味深い。また、都会で見られる牡丹雪や雪片の写真も、身近さを感じられる。雪片の写真では、たくさん結晶が絡み合っているばかりでなく、ところどころ

に雲粒も付着しているように見えるが、いかがだろうか。第8章「雪面模様」では、地面に積もった雪に触れている。新雪による一面の銀世界、そして春になると見られる根開きやスプーンカット模様が何か懐かしい。第9章「雪道」以降は、生活への影響の話題ということで、これまでと若干話が変わった感がある。ともあれ、雪国に暮らしたことがあると、アイスバーンやブラックアイスバーンの恐ろしさは身をもって体験しているであろう。また地吹雪で視界がほとんどゼロになるのも恐ろしい。評者も、伸ばした手の先が見えない状態に遭遇したことがあるが、非常に恐ろしい体験であった。そういった体験を伝えていくことも重要なことであろう。第10章「山の雪」では雪まくりや雪崩などの雪山に見られる現象に触れている。第11章「雪害」は、まさに人間生活との接点である。毎年のように落雪事故などが報じられるが、雪の多い土地に暮らしたことがなければ、なかなか実感がわかないかもしれない。巻き垂れなどは、屋根の雪下ろしをせず

に放置した雪が窓ガラスを割る危険を想起させる。第12章「富士山の12カ月」は雪を纏う富士山の月ごとの風景を示している。最終章の第13章「南極の不思議な雪と氷」は第一部の最終章（第6章）同様、海外に思いを馳せる場のようなものである。

評者も雪や氷の写真が好きで、寒い朝が予想された休日には滝や溪流などの氷の造形が見られそうな場所を訪ねることがある。溪流脇に光る飴細工のような氷やしぶきによる氷、朝方、気温が上がるに従って崩れ落ちる滝の氷などはなんとも印象的である。気象庁にも、写真好きの職員やOBが自主的に集まって設立した写真倶楽部があり評者も参加しているが、季節の風物詩ばかりでなく、雲や大気光学現象、さらに本書で紹介されるような氷の造型等に注目する傾向がある。このような本に触発されて同好の士が増えることを期待しつつ結びとしたい。

(気象庁気候情報課 佐藤芳昭)